
Nil Admirari

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Nil Admirari

【Nコード】

N7487A

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

空を這う者たちの物語。僚機であるヒツガヤが墜ちた。不可解な死とその陰に動く軍。

ニル・アドミラリイ

砲撃がフォツサルタの残壕をこなごなに打ち砕いているあいだ、彼は地面に横たわり、汗を流して、ああイエス・キリストよここから逃がしてくれ、と祈った。

ねえイエス様どうか逃がしてください。

キリストよ、どうか、どうか、キリストよ。

殺されないようにしてくれさえすれば、なんでもおっしやるとおりにいたします。

僕はあなたを信じますし、あなた以外にだいじなものなんかにもないと、世界中のみんなに話します。

どうか、どうかイエス様。

砲撃は戦線を向こうほうへ動いていった。

われわれは残壕掘りの仕事にでかけた。

朝になると太陽が昇り、その日は、暑く、湿気が多く、陽気で、静かだった。

つぎの日の晩またメストレへ行った彼は、ヴィラ・ロツサでいっしょに二階にあがった女の子に、イエスのことを話さなかった。

彼は誰にも話さなかった。

(われらの時代にノヘミングウェイ)

ステンレスのシリンダーが不気味な音をたてた。

痛みがないから、飛行機乗りは空に上がってから異常を知る。

そして、空に上がってしまえば、既に手遅れなのだ。

翼の先から、細く、煙を吐いて静かに僚機の墜ちていく様を見た。

実際には、当然のように僕たちを地面に縛り付けておくための何か
が其処にあった。

僕たちは、鳥ではない。鳥の手足でもなければ、くちばしでもない。
僕らは鳥の目と耳と心臓であるから、僕らが失われれば鳥は飛ばない。
い。

最初に考えたのは、自殺。次は居眠り。いくら考えても、匹蚊帳が
死ぬ理由が見付からなかった。

実際には、理由なんてものは、ほんの少しのキツカケと後押しする
何かがあれば十分だ。

生きていることが理由にもなるし、生き続けることが理由にもなる。

僕は死なない。もうそれだけで死にたいと思う理由にならないだろうか。

僕はまだ、死にたいと思ったことはない。そう思った時には、既に右手を引金に掛けている。

簡単に幕を降ろせるからこそ、簡単に幕を降ろさないことにしている。

トラブルを告げる信号は最後までなく、緩やかに惰性で前に進みながら炎を上げて僚機は墜ちた。

黒い煙がいつまでも不快な臭いを発していた。

決定的に違うのは、ヒツガヤが死んだこと。僕が死ななかったこと。

報告をするのはいつも、リーダーであるヒツガヤの役目だった。

よっぽどの成果やトラブルがない限り、呼ばれることはなかった。

「ってことは、トラブルの信号はなかった訳だね」

若い、よく通る声は、あきらかに不満そうだった。

三回、状況を説明したが。三回とも同じ質問をされた。

「はい、信号はなく。無線にも応答はありませんでした。」

「そうか…事後処理がすんだら、詳しく分かるだろうが、今は待機しててくれ」

報告が終わったのは、日が暮れてからだった。

うんざりするような質問討議の中で、何度も聞かれた事を仲間にも聞かれた。

食堂では、待っていたように本田と神弟波が僕を捕まえた。

「ヒツガヤは最後に何かいってなかったか？」

「いや、何も。」

「信号はなかったのか？無線も。」

「なかった。むしろ電源を切ったのはヒツガヤ自身だった。」

「そうか…」

冷えたビールを持ってテーブルに戻っていくホンダを見て。

こいつはどこまで知っているんだろう、と思った。

正確には、僕は嘘をついていた。報告の中では、無線はなかったと言ったが、ヒツガヤは最後に無線をよこした。

地面からそう遠くない位置だったように思う。

「…俺の私物はできるだけ早く処理しろ。そして、アサギリを信じるな。報告無用。最後に、ホンダの野郎に先に行く伝えてくれ。」

「了解。」

厄介な仕事。それも命に関わるような。

アサギリの部下になってから、そう早くない内に近くの街で殺人事件があった。

軍は関与を否定したが、ジープが一台なかったことを僕は知っていた。

ヒツガヤが何を知ったのかは分からない。

二段ベットの上にあったはずの荷物は既になかった。たぶん分かっていたのだ。

僕が報告するより早くに、ヒツガヤが墜ちたことを…。

僕はベットのマットを外した。

ヒツガヤのエロ本もなかった。

ヒツガヤが昨日、そこに寝ていたという痕跡はなかった。

そこには何もなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7487a/>

Nil Admirari

2011年1月9日15時02分発行